自ら考え、自ら学ぶ漢字学習のあり方とは

漢字学習は受け身から自学自習へ

個別最適な学びと、協働的な学びを一体的に充実させ、主体的・対話的で深い学びを実現することが求められている現在、言語能力の土台となる「漢字学習」も変革の時を迎えている。明星大学教授（元筑波大学附属小学校教諭）の白石範孝氏らが企画・監修した漢字学習帳「漢字のとびら」は思考力や課題解決力を伸ばす教材として注目を集める。繰り返し書いて覚える方法を脱し、子ども自身が考え、伝え合いながら身に付ける漢字学習に挑む2校を紹介する。

漢字学習をとおして「自学力」を高める

群馬県・安中市立秋間小学校

主体的な学習態度を育てたい

安中市立秋間小学校（木口敦子校長、児童数101）は2021年度より「西部教育事務所学力向上実践事業」の指定を受け、主体的・対話的で深い学びの実現に向け「自ら学び、考え、表現できる児童の育成」を目指す。国語科での言語能力の育成と他教科における活用を研究中だ。

今年度、力点を置くのは児童の「自学力」を伸ばすこと。小規模校である同校は教職員や保護者、行政や地域の人たちと、児童への対応は手厚いものがあるぞ。その反面、一人一人が自分の学びを評価して改善していく力に課題があると、木口校長は指摘する。授業と家庭学習の両面で受け身ではない、主体的な学習態度を育てるための、さまざまな努力が重ねられている。

その一つが、漢字のとびら」の活用だ。最初、手に取った6年担任の岩﨑杉子教諭は、自学力を高める予習型の学習に有効ではないかと感じたという。「その漢字の間違えやすいところを意識させる問題がある。これまでの漢字学習は教師主体で進めることが多かったが、自分で自分の力を把握しながら学べるのではと思った」と採用の理由を語る。

PDCAサイクルに漢字学習は最適

自学力を高める方策として、同校は児童が自分で学習のPDCAサイクルを回せるようにサポートをしている。（1）学習のめあてを立てる（2）テストで問題を解き（3）自分で結果を分析する（4）改善・定着に向けて練習する、という流れを漢字のとびら」を用いて児童に定着させることを目指した。

「定着確認テスト」は（2）のテストで問題を解くときに用いる。個人の進度に合わせてチャレンジできるよう先にすべて印刷して児童に配付する。児童はテスト問題を解き、その後「漢字のとびら」で答え合わせをする。

異学年の「学習交流会」で漢字ノートの勉強法を紹介

学年で紹介し合う「学習交流会」では、6年生が漢字ノートを4年生に見せた。「6年生のノートを見て〝こんな風になりたい〟という憧れの気持ちが高まった。いい影響を受けて4年生も変わった」と、担任の田島大地教諭は子どもたち同士の教え合いや学び合いが、自学力向上に役立つと実感している。

間違ったところや気を付けたいところをノートに分析し、練習する。こうすれば教師が指示をしなくても自分で漢字学習が進められる。

このやり方を始めてから、児童の漢字練習のノートは大きく変化した。お手本を見て繰り返し書く方法から、「とめ」や「はね」「はらい」で気を付けたいところや、間違えやすい筆順、読み方や意味などを書き込みながらとめるようになったのだ。「考えながら」学ぶ「漢字のとびら」のコンセプトにぴったりの学習法だ。

学習方法や成果を異学年で紹介し合う「学習交流会」では、6年生が漢字ノートを4年生に見せた。「6年生のノートを見て〝こんな風になりたい〟という憧れの気持ちが高まった。いい影響を受けて4年生も変わった」と、担任の田島大地教諭は子どもたち同士の教え合いや学び合いが、自学力向上に役立つと実感している。

ICT活用で児童が漢字テストを考案

6年生に刺激を受けた4年生は、漢字学習をより楽しいものにするユニークな方法をタブレットで編み出した。「漢字のとびら」の「力だめし」のページは、読みを問う問題と、書き方を問う問題があるぞ。それを反転した問題をGoogleフォームのテスト作成機能を使ってアップロード。家庭に持ち帰ったタブレットで問題を見ながら力だめしをする。「漢字のとびら」を見て自己採点し、練習に役立てるというものだ。

田島大地教諭は「子どもたちが自ら考えた方法。自分で学ぶ学習の一つにつながり、これからが楽しみ」と顔をほころばせる。今後は「漢字のとびら」を入口に、他の教科でもPDCAサイクルを回せる児童を育てていきたい考えだ。

木口校長は「漢字は子どもたちに最も身近な自主学習の一つ。『漢字のとびら』を用いて、自分の課題を見つける目や、自分で工夫して学ぶ力が育っている。課題を乗り越えるため自己評価をして試行錯誤する力は、社会課題に向き合う意欲につながるはず」と語る。

（右から）木口敦子校長、田島大地教諭、岩﨑杉子教諭

新たな言葉と出会い学び合える漢字学習へ

山梨県・大月市立猿橋小学校

語彙力向上に期待

「思いゆたかに学びを拓く」を学校教育目標に、どの子も自己肯定感を持ち、安心して学べる学校づくりを推進する大月市立猿橋小学校（小林正樹校長、児童数298）。今年度、3・4・5年生で「漢字のとびら」を導入している。

採択2年目の笹本恭平教諭は昨年度、校内で3年生用の漢字教材選定の機会に立ち会い、初めて「漢字のとびら」を手にしたという。

「新出漢字の下にある〝使い方〟に子どもたちが普段使わないような言葉が紹介されていて、語彙を養うのに適していると感じた」と第一印象を語る。

間違っているのか、正しいのかをじっくりよく見て考える「送りがな名人」「書き名人」は、何となく覚えている書き方を子どもたちが認識し直すことができる。間違えやすい漢字を示したワンポイントチェックは授業で指導する際の参考になると、決め手がいくつもあったと振り返る。

今年度、担任する5年生でも「漢字のとびら」を継続して使っている。新出漢字は授業の中で10分ほどかけて指導する。読み、間違いやすいところを確認した後、書き順の確認、各自で書く、といった順番だ。

早く書き終えた児童は辞書で調べて、その漢字を使った言葉を書き込む。発表すると「救」なら「救援」「救出」「救世主」など聞きなれない言葉も。そんなときは全員で意味を調べ、例文も紹介する。「どれも助ける、という意味合いがあるね」などと意味を確認していく。「漢字はいろいろな使い方ができると、活用の意識を持たせたい」と笹本教諭は語る。

辞書と併用し語彙力を高める

定着度を測るテストは「漢字のとびら」を採択した学校にサポートツールとして提供される「定着確認テスト」で、授業のはじめに5分で実施する。

多くの児童が満点を取れるようにと、同じテストを2日連続、出来によっては3日連続して出すこともある。答え合わせは正解を黒板の右側に書き、丸つけ後も消さずに残しておく。こうすることで、いつでも児童が漢字の形や読み方を確認することができ、家庭学習の意識が高まるという。子どもの気持ちや認知傾向を把握しつつ、確実に定着へと導く工夫がされている。

「調べればわかる」辞書活用で自信

笹本教諭の「漢字のとびら」の活用で重要な役割を果たすのが国語辞典だ。セットで使うことで語彙が広がる。

1学期は自分で調べた新出漢字のページにふせんを付けさせ、調べたことを「見える化」するようにした。これを続けることで辞書引きが習慣づき「漢字のとびら」を使うときは、辞典を横に置くのが定着したという。

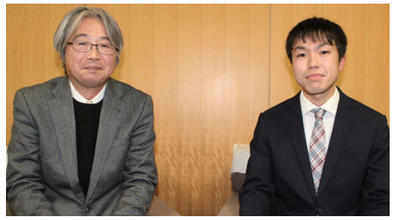
国語辞典は小学校高学年用であれば自由に選べるのもポイントだ。互いの辞書にない熟語や例文を出し合うことで児童の語彙は広がる。わからない漢字は「調べればわかる」という自信もついた。

手で書く力もしっかり支える

笹本教諭は「文章を見ても、漢字を正しく使えるようになってきた」と、児童の変化を感じている。1学期には出題する漢字をすべて指定して書き取りテストを行っていたが、2学期は教科書の範囲だけを示すことにした。それでも8割以上の出来だったことから、児童が自分で考え、調べて練習するという、進んでやる学び方が定着しつつあるとみている。

「本校の目指す子ども像の一つに、学習の主体者として自主性と主体性を発揮できる子どもを掲げている。5年生も本校の目指す方向に進んできているのを感じる」と小林正樹校長も児童の変化を語る。

1人1台コンピューター端末の活用も進むが、同校は紙に書く指導とのバランスも重視する。そんな中で「漢字のとびら」は児童の「書く」を支える有効な教材となっている。



（左から）小林正樹校長、笹本恭平教諭

「考える」ことを大切にし、楽しく漢字を学ぶ。

白石式考える漢字学習帳『漢字のとびら』

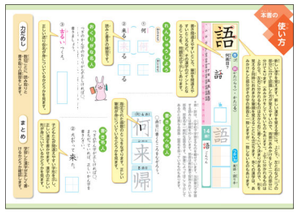
「きまりがみにつく漢字のとびら」
小学1～6年生：年間1冊／定価各850円（税込）

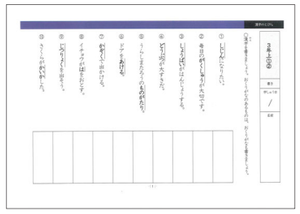
「漢字のとびら」
小学1～6年生：各上・下巻／定価各460円（税込）
※本教材は、光村図書の教科書「国語」を参考にして作成しています。

企画／監修・著
白石 範孝 明星大学教授（元筑波大学附属小学校 教諭）
『考える』楽しさを新しい漢字学習帳で
「国語は好きだけど漢字は嫌い」という声をよく耳にします。
漢字学習は、「お手本を見て繰り返し書いて覚える」という方法が一般的です。
しかし、漢字にはさまざまな「きまり」があります。漢字のきまりを理解し、活用することで繰り返し書かなくても漢字は正しく覚えられます。
「漢字のとびら」では、漢字のきまりを知り、書き順や間違えやすいところを児童に意識させてから書かせます。さらにひとつの漢字を見て、正しいか、正しくないかを自分で判断し、正しくなければどこが違うのかを、明確に指摘できるような問題を設けました。自分で「考える」学習、「考える」活動を大切にして、漢字を楽しく学べるようにしたいと願ってこの教材をつくりました。

著
青木 伸生
筑波大学附属小学校 教諭
漢字を通した「思考のプロセス」が身に付くと、子どもたちは正しく書けて他の漢字との共通点が見えてきます。漢字を見る目は考える力につながります。

著
白坂 洋一
筑波大学附属小学校 教諭
漢字のきまりを見つけ、知ることで漢字の学習はより容易になります。「わかった！」「そうか！」こんな声が、子どもたちから漢字の学習を通して聞こえてきそうです。





きまり、光村版上下巻の各学年に「定着確認テスト」と学習した漢字を実践で使う「漢字で作文」をご用意しています。ご利用の際は専用のID／パスワードが必要です。

内容詳細につきましては、ご審査用見本をご覧ください。見本ご請求は右記まで▶
お問い合わせ TEL 03-3304-5314 FAX 03-3304-5010 WEB https://www.next-edu.or.jp
企画 特定非営利活動法人 次世代教育推進機構 for Education of Next Generation
発行・販売 教育開発出版株式会社